

# 大学の外国語学習者における動機づけと 仮想的有能感に関する調査

陳 惠貞<sup>\*1</sup>

## I. 問題と目的

大学生の外国語を勉強する動機について、「大学の外国語学習者における動機づけに関する実態調査」(陳, 2006)を検討してきた。中国語を第2外国語として勉強する動機は様々であるが、調査結果によると「中国語に興味があった」と「中国語が将来に役立ちそう」が上位を占めた。中国語に興味があり、将来性を見添えることで、外国語として最初はやりたい、勉強してみようという強い動機づけでやり始めた。しかし、いくらやる気があっても、すべての人はみんな中国語をマスターすることができるとは限らない。一つの外国語を習得するには、多くの要因が絡んでいる。まずは、中国語の独特な発音(四声調・巻き舌音・変調など)、それから日本の漢字と似たり異なったりした簡体字、文法、時には俗語やことわざも多く使われ、決して簡単だとは言えないものである。また、文化の背景や習慣によって、表現の仕方もたびたび理解しがたい所があると思われる。これらはすべての外国語を習得する際には共通し、必ずぶつかる難点である。そして、他の要因の影響も無視することができない、例えば、友人や親や先生の影響、他の科目との兼ね合いなども考えられる。やる気があるから即ち成功するとは限らない、あくまでも入り口に一步踏み込んだに過ぎないのである。そこに、やる気は大事であるが、それより長い期間によるやる気の変化、およびやる気を持続するのに妨げる要因について考えることにした。

やる気について、宮本(1993)によると、「やる気は、心理学では達成動機として研究されている。達成動機とは、その文化において優れた目標であるとされる事柄に対して、卓越した水準でそれを成し遂げようとする意欲をいう」と記されている。前回、陳(2006)にも達成動機づけについて言及したが、「Atkinson(1964)の達成動機づけ理論によれば、達成傾向が高くて、失敗回避傾向が低いと達成動機が高まり、達成行動が起こる。反対に言い換えれば、達成傾向が低くて、失敗回避傾向が高いと達成動機が阻害され、達成行動が起こらないであろう。」という視点から失敗回避傾向に重点をおき検討した。今回は視点を換え、時間の点ではなく、個人内のある一定の期間におけるやる気の変化について着目し、検討する。つまり、動機づけに関する3項目と新たにやる気の変化を表すやる気曲線との関連を検討することにした。

更に、ソーシャルサポートを提供する側として、ここ数年教育現場で学生が変わってきていることが気になる。ここで、最近数年私が体験した事例を2つあげることにした。

---

※1 言語コミュニケーション学科

事例1：数年前、ある出欠席が厳しい専門学校で、私は非常勤をしていた頃のことであった。ある日授業が始まり、出欠席を取っている時に、ある男子生徒が席にいなかったから、当然、欠席扱いになった。授業を終え、私はその男子生徒がいることに気がつき、「〇〇君がいましたね、いつ来たの？じゃ遅刻だね」と何気なく遅刻扱いにした。そうしたら、その生徒が大変険悪そうな顔をして、ずっといたことを主張した。それと同時に、後ろの席の女子生徒もその男子生徒をかばうように、男子生徒が朝からいたことを証言し、おまけに「先生は気が付かなかっただけだよ」と言い放した。しかし、私が出席を取っていた時は、確かにその男子生徒がいなかったことには確信があるし、2回も名前を読み上げて、確認したはずであった。そうすると、男子生徒が「僕はトイレだったから、遅刻を取り消してください」と主張した。席にいなかったし、遅刻が間違いないのに、どうして遅刻を取り消しと強気で要求できるかと思った。そうすると今度、男子生徒が「先生が不公平だ」と言い出した。わけを聞くと、「他の子が出席を返事してから、トイレに行くのが良くて、どうして僕だけに厳しい」と批判をした。というように、自分の非を差し置いて、自分の不平不満を爆発するように他者を批判する若者がいた。1クラス70名以上の生徒数にもかかわらず、先生が自分に気付いてくれたことや、あやうく欠席にされるどころだったと感謝するどころか、授業中にトイレへ行くことを正当化し、反発かつ強引な態度で教師に向かってくることに当時の私は大変衝撃を受けた。

事例2：ある大学には成績評価に関する質疑制度がある。ある年、某男子学生が電話をかけてきて、「評価Bをもらったが、Aにしてもらえませんか？……Bの評価について不満はないが、僕はこの授業を甘く見て、宿題も出してなかったし、あまり頑張らなかつたから、でも、前期はこれでA取れたから、しかも先生が非専攻生には宿題の提出を強制しないと行ったから、後期もこれでいいと思った……」と苦しい理由を並べて評価BからAに変更してほしいと要求してきた。実はこの学生は前期では確かに群を抜いて優秀そうにみえた。しかし後期になって、努力しない上、クラスの他の学生が彼を遥かに抜いてしまったことに、彼は気づかなかつた。このような学生は、この先生が甘いからこのくらいの努力でいい評価が取れると思ってしまうと、それ以上はもう頑張らないようである。このように先生によって、あの先生ならもっと頑張らないと良い評価をもらえないという不純な動機で勉強し、「要領よく」、学業に全力で頑張らない学生を見過ごしていくと、将来地道に努力せず、世渡り上手な社会人になっていくだろう。長い目で見れば、決して彼のためにもならないし、日本社会のためにもならないと思われる。なぜなら、現在の日本社会のいわゆる「官僚」やエリートには、このようなズル賢い人は少なくないような気がしてならないからである。このような風潮を正すには、家庭内のしつけと教育現場の両方から地道に子どもたちに教えるなり、大人の正しい姿勢を見せるなりしていくほかはないと考える。ここで教育論を論ずるつもりはないが、ただ当時はその男子大学生が自分の努力が足りないと反省しているふりをしながらも、いい成績を取るために無理やり教師に非を押し付け、持論を通そうとする姿に違和感を覚えた。

一方、他の教師から聞いた話だが、授業中にガムを噛んだり飲食をしたりする学生、病気でもないのにすぐにトイレと言い授業中に教室から抜け出す学生、平気で教師を批判し、先生の指摘を無視し横暴な言葉使いをする学生など、日本の教育現場が荒れているような気がしてならない。公の場で平然と先生を批判する学生、昔はまず自分の不勉強を反省し、それから先生の指導を請うてい

た。現代では、先生の教え方が下手だとまず批判をする。この場合、先生を批判しても、分からないところは理解できないままになってしまう。それより直接先生に聞くか、理解するように努力する方がためになるのではないかと思った。また、学生の中に、偉い教授なのに、～ちゃん呼ばれられていることや先生の名前を呼び捨てにすることを耳にした。人気のある先生だと好意的に取れる見方と仲間扱いされた見方、そして尊敬の意が感じられないという複雑な感じがした。

更に、学生なのに、年齢や身分に相応しくないブランドの品々を持ち、外車を乗り回し、明らかに学生のアルバイトでは手に入れられないようなものを使っているという現象、これは裕福な家庭の出身で、親が甘やかすすぎているといえる。また、外車に乗って、スピードを出しすぎや交通ルールを平気で無視したり、割り込んだり、周りの車を追い越しながら、横暴な態度で「遅いだよ×××……」と怒鳴ったり罵ったりすることなどを何度も経験した。しかし、それによってすべてではないが、若者が変な優越感を持ち、他者を見下す言動に繋がったのではなからうかと推察する。勿論、これらは極一部の学生だが、この事実が存在していることには違和感があった。こういった教育現場や現実の日常生活で遭遇した様々なケースに違和感を持ちながら、この間読んだ本で、長い間胸にある痞えが取れたような感じがした。それは、「仮想的有能感」という概念であった（速水、2006）。速水による「仮想的有能感」というのは、「過去の実績や経験に基づくことなく、他者の能力を低く見積もることに伴って生じる本物でない有能感」（p.118）である。そして、これを「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義した（p.131）。著作の表紙にも分かりやすく書かれているように、「若者の感情とやる気が変化している」、そして、彼らの特徴として ①自分に甘く、他人に厳しい ②すぐにいらつき、キレル ③「悪い」と思っても謝らない ④泣けるドラマや小説は大好き ⑤無気力、鬱になりやすい とあげられている。この中のいくつかは、今まで私が遭遇したケースに当てはまるものがあった。

「仮想的有能感」という概念は心理学会ではまだ定着されていないが、ここ数年心理学会では次から次へと発表され、論文や著書もあった。まずは、速水らが2003年に日本教育心理学会で、自主シンポジウム「『仮想的有能感』をめぐる」を発表して以来、翌年「仮想的有能感の構成概念妥当性の検討」という論文を発表した（速水ほか、2004）。それから、宮川の論文である「インターネット利用と仮想的有能感の関連」（宮川、2004）、また、“Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness”（Hayamizu et al., 2004）という研究論文が発表された。同じ2004年に木野らは「仮想的有能感の発達の變化—横断的データを用いた検討—」（木野ほか、2004）というテーマで、高木らは「仮想的有能感尺度の妥当性検討」（高木ほか、2004）というテーマで日本教育心理学会において発表をした。また、山田らは「仮想的有能感と性格検査との関連—16PMとの関連カラー—」（山田ほか、2004）というテーマで日本パーソナリティ心理学会において発表した。

2005年に、「他者軽視に基づく仮想的有能感—自尊感情との比較から—」（速水ほか、2005）という研究論文の発表があった。また日本社会心理学会では、「有能感タイプと日常生活に対する評価—経験抽出法（ESM）による検討」（高木ほか、2005）と日本感情心理学会では、「青年の日常的な感情経験と仮想的有能感」（木野ほか、2005）と相次ぎ学会で発表された。

そしてつい2006年の2月に速水の著作「他人を見下す若者たち」(速水, 2006)の発売によって、数回にわたり、テレビ報道番組の取材や出演など、たちまち注目されるようになり、大変反響を呼んだものようであった。この著書の中で、速水は「心理学という土俵の上で縦糸と横糸として織り込んだ」、また、「日常的な人間ウォッチングの結果」とした。本書を通して、日本の教育現場で昔から今日までその時その時の社会現象や事件などを流覧でき、更に近年の若者の特徴と言えるべき変化が事例を通して、分析し持論で説明をした。また調査を通じて、自尊感情と仮想的有能感との関係を検証した。その上、ホワイトのコンピテンスの概念に基づいた仮想的有能感の解説やタイプ分けを行った。そして、一連の実験や調査によって、仮想的有能感を測定する尺度を作成された。その他、発表した研究論文として、「仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連」(速水・小平, 2006)があった。

2006年の9月に日本教育心理学会において、相次ぎ多くの発表がされた。「仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション」(小平ほか, 2006)と「仮想的有能感と就職活動に対する意欲、就労観との関連」(植村, 2006)と「仮想的有能感尺度に対する項目反応モデルの適用と検討 仮想的有能感概念とその尺度の再検討(1)」(脇田ほか, 2006)と「対自・対他評価と仮想的有能感の関係 仮想的有能感概念とその尺度の再検討(2)」(高木ほか, 2006)と「帰属様式と仮想的有能感 仮想的有能感概念とその尺度の再検討(3)」(浦上ほか, 2006)が発表された。

以上のように、ここ数年、「仮想的有能感」について多くの方々に注目され、研究なされてきた。さて、今回本研究の目的はまず、本学の大学生の動機づけレベルを調査し、一定の時期に渡って学生たちの動機づけの変化とやる気の変化を調べ、更にやる気変化型やタイプを分類することを第一の目的とする。次には、動機づけとやる気の変化に、仮想的有能感との関連を調べることを第二の目的とする。よって、本学の大学生に対して、アンケート調査を行うことにした。

## II. 方法

**調査対象：**本学の大学1年から3年生が対象で、すべて中国語の授業を受けている学生である。被験者数は220名である。

**調査時期と方法：**2006年度7月に前期の最終授業中であった。回収率は100%であった。方法としては、質問紙法を用い、無記名回答をしてもらった。

**調査内容：**自作の質問紙で、まずは①中国語を学習する動機について(複数の選択肢から選択し、順位をつける)、②どのように中国語を勉強し続けるように工夫しているかについて(この項目も複数の選択肢から選択し、順位をつける)、③この先中国語を勉強し続ける動機の想定についてなど尋ねた。④では中国語を勉強してきた当初と現在のやる気の変化について尋ね、やる気レベルによって、やる気の変化曲線を作成した。やる気レベルの評価では、1全然やる気がない、2あまりやる気がない、3どちらともいえない、4やる気がある、5やる気満々の5段階評価であった。更に、上級生には1年目、2年目もしくは3年目のやる気変化曲線も作成した。

質問紙の第⑤～⑮問までは、仮想的有能感尺度の項目(速水, 2006)を用いた。最後に中国語の学習歴と毎週の中国語の履修コマ数について尋ねた。

質問紙の内容と構成項目は以下の通りである。

1. 中国語を学習する動機について、その理由をお聞きます。（複数可、順位を付けて）
- ①中国という国に興味があった。 ②中国語に興味があった。 ③将来に役立ちそう。  
 ④英語が苦手だから、なんとなく中国語を選んだ。 ⑤親に言われたから。  
 ⑥簡単そうだから。 ⑦その他、理由： \_\_\_\_\_

順位： \_\_\_\_\_

2. ご自分はどのように、中国語を勉強し続けるように工夫していますか。（複数可、順位を）
- ①毎日勉強するようにしている。 ②目標を定めて、頑張るようにしている。  
 ③中国の友達がいる。 ④中国の番組や映画をみるようにしている。  
 ⑤特に何もしていないが、とにかく興味がある。 ⑥友人の影響。 ⑦テストがあるから。  
 ⑧その他、具体的に \_\_\_\_\_

順位： \_\_\_\_\_

3. 現在またはこの先、ご自分が長く中国語を勉強し続ける動機として、どのようなものと想定していますか。（複数可、順位を）
- ①友人と一緒に勉強しているから ②親友の影響（引っ張って、励ましてくれる友人がいる）  
 ③家族の支え、励まし ④親しい先生の影響（勧めて、励ましてくれる） ⑤大好きな中国語の先生がいるから（人間性的に尊敬し好きである） ⑥将来性があるから ⑦全く理由が分からないが、何故か好きで続けているし、これからも勉強し続けていく  
 ⑧その他、具体的に \_\_\_\_\_

順位： \_\_\_\_\_

4. いままで中国語を勉強してきて、当初と現在のやる気の変化について伺いたいです。（5段階評価による自己評定で、やる気がある場合は5に、ない場合は1にしてください）

	新学期に入ってから	4月	5月	6月	7月	
や	5	_____	_____	_____	_____	やる気満々
る	4	_____	_____	_____	_____	やる気がある
気	3	_____	_____	_____	_____	どちらともいえない
レ	2	_____	_____	_____	_____	あまりやる気がない
べ	1	_____	_____	_____	_____	全然やる気がない

理由：

裏へ

上級者の場合	1年目	2年目	3年目
やる気レベル	5	_____	やる気満々
	4	_____	やる気がある
	3	_____	どちらともいえない
	2	_____	あまりやる気がない
	1	_____	全然やる気がない

理由：

次は最近日常生活の中で、思ったことや感じたことについてお聞きします。

当てはまるところに丸で囲んでください。

5. 自分の周りには気のきかない人が多い。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
6. 他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
7. 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
8. 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
9. 他の人に対して、なぜこんな簡単なことが分からないのだろうと感じる。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
10. 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りに少ない。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
11. 他人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
12. 私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
13. 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
14. 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う
15. 世の中には、常識のない人が多すぎる。  
①全く思わない ②あまり思わない ③どちらともいえない ④ときどき思う ⑤よく思う

最後に、第2外国語の学習歴 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_ヶ月、授業は週に \_\_\_\_\_コマ取っています。  
授業以外の勉強時間はおおよそ \_\_\_\_\_時間。

### Ⅲ. 結果と考察

調査の結果と考察は、質問紙の順で、以下の通りである。

1. 中国語を学習する動機とその理由について尋ねた。選択肢として以下の7項目である。

- ①中国という国に興味があった。 ②中国語に興味があった。 ③将来に役立ちそう。  
④英語が苦手だから、なんとなく中国語を選んだ。 ⑤親に言われたから。⑥簡単そうだから。  
⑦その他、具体的な理由。そして、「複数可、順位を付けて」と指示した。結果は以下の Table 1 に示している。

Table 1 中国語を学習する動機とその理由の各項目の順位と頻度 (n=220)

	項目 ①	項目 ②	項目 ③	項目 ④	項目 ⑤	項目 ⑥	項目 ⑦
順位 1	12	82	105	5	0	0	16
順位 2	29	58	55	13	3	2	5
順位 3	27	11	27	10	0	3	3

Table 1 に示しているのは、各項目のそれぞれの順位と頻度（選んだ学生の人数）である。ここから一目瞭然で、被験者220名中105名が項目③の「将来に役立ちそう」を選択し、他の項目を大きく引き離し、1位を示していることから、中国語の将来性を高く評価していることが分かった。大学生たちは中国語の重要性や将来性に目をつけ、高く評価していることが窺われる。

また、すべての順位で、項目③が上位に占めていることも分かった。この結果を去年の調査（陳, 2006）の同じ質問に比べると、大きく変わった。去年は「項目②中国語に興味があった」と「項目③将来に役立ちそう」共に1位を占めたに対し、今年的大学生が大いに中国語の将来性を認める傾向にあるといえよう。

2位は頻度82名の項目②「中国語に興味があった」であった。ここでは、今年的大学生が中国という国に興味があったわけではなく、「中国語」という語学に興味があったことが分かった。

そして、順位1には項目⑤の「親に言われたから」と項目⑥の「簡単そうだから」が欠けていることについて考えてみよう。学生たちはご自分の意思で中国語を学ぶことを決め、親の言われたままではないことが分かった。また、軽い気持ちで「簡単そうだから」学ぼうとするのではなく、真剣さをうかがうことができよう。或いは、中国語が難しいという先入観があって、決して「簡単そうだから」とは言えないゆえに、こういう結果になったかもしれない。その真意を更に確認する必要があるであろう。

また、順位1の三番目に並んでいる項目⑦の「その他」を選んだ学生16名が意外と多い。詳しく内容を見ていくと、実にさまざまな理由があった。その実例を以下にあげてみることにしよう。事例の後ろに括弧が付いている数字は頻度を表している。括弧のないものは1名のみと表している。

- ・必修科目だったから（9）
- ・最初は全く興味がなかったけれど、勉強し始めたら楽しくなってきたから（2）
- ・週1回だと覚えられないと思ったから（1）
- ・英語以外の言語も学びたかった（1）
- ・なんとなく（1）

- ・中国の文化に興味があった（1）
- ・英語だけでは就職が何となく不安だったから（1）

この中で説明する必要があるのは、「必修だったから」と「最初は全く興味がなかったけれど、勉強し始めたら楽しくなってきたから」を分けて記入するわけである。まず、『必修』というのは、すべての被験者ではないが、一部の被験者は言語コミュニケーション学科の学生で、一年生の前期だけに必修科目として「中国語入門」という基礎の授業があるためである。そして、分けて記入したのは、「必修だったから」という理由で書かれたのは、いやがっていて無理やりにやらされているという心境の可能性もあると考えられるからである。今回の調査にはなかったが、実際に前回の調査には一例のみだが、「やらされているって感じがつよくて、いやだった」とはっきり記入している学生がいた。つまり、「必修だった」と記してあるのは、マイナス傾向という可能性を除くことができないということである。無記名なので、それらの真意を確認することができないため、「最初は全く興味がなかったけれど、勉強し始めたら楽しくなってきたから」というプラス傾向の2例と分けて記入したわけである。前回にも述べたように、確かに「強制」要因、いわゆる自由に選ぶことができないことや束縛感があることによって、自己決定感が得られない不安定な状態になると内発的動機づけを阻害する要因になりかねないことが考えられる。特に反抗的な感情が生じると強い心理的な葛藤になり、回避的な行動に発展してしまうケースも考えられるであろう。内発的動機づけの負の方向性に関する研究（陳, 1993；上淵, 2004）にも取り上げた。

2. どのように中国語を勉強し続けるように工夫しているかについて聞いたところ、以下の選択肢から選ぶように指示した。

- ①毎日勉強するようにしている。 ②目標を定めて、頑張るようにしている。
- ③中国の友達がいる。 ④中国の番組や映画をみるようにしている。
- ⑤特に何もしていないが、とにかく興味がある。 ⑥親友の影響。 ⑦テストがあるから。
- ⑧その他、具体的な理由。そして、「複数可、順位を付けて」と指示した。

結果はTable 2の通りである。

Table 2 中国語を勉強する工夫についての各項目の順位と頻度 (n=220)

	項目①	項目②	項目③	項目④	項目⑤	項目⑥	項目⑦	項目⑧
順位 1	18	70	12	8	41	13	48	9
順位 2	11	22	20	16	13	15	40	1
順位 3	6	8	5	11	4	6	8	4

順位1にある項目②「目標を定めて、頑張るようにしている」という項目がこの表の中で頻度70を示し、群を抜いて一番多い。この項目は実は語学学習を持続させて、内発的動機づけを高める因子である。

順位1で2番目に続いている項目⑦の「テストがあるから」というのは、外発的動機づけを高める因子である。この項目は順位2では実は1番多く選ばれたものであった。確かに、テストがある

と、勉強せざるを得ない状況になり、勉強する動機づけには無視できない効果があった。

この質問の調査結果から、特に1年生の被験者が多い中で、中国語を勉強してまた4ヶ月しか経っていないが、ちゃんと中国語学習に意識し、目標を定め、真剣に勉学する姿が目には浮かぶ。また、実に上手に外発的動機づけを高める因子である「テストがあるから」を利用し、自ら内発的動機づけを向上させようとするのが推察できる。

3. 中国語を長く勉強し続ける動機として、どのようなものを想定しているかと質問したところ、以下の選択肢から選ぶように指示した。

- ①友人と一緒に勉強しているから ②親友の影響（引っ張って、励ましてくれる友人がいる）  
 ③家族の支え、励まし ④親しい先生の影響（勧めて、励ましてくれる） ⑤大好きな中国語の先生がいるから（人間性的に尊敬し好きである） ⑥将来性があるから ⑦全く理由が分からないが、何か好きで続けているし、これからも勉強し続けていく ⑧その他、具体的な理由。そして、「複数可、順位を付けて」と指示した。結果はTable 3の通りである。

Table3 中国語を長く勉強し続ける動機の想定についての各項目の順位と頻度 (n=220)

	項目①	項目②	項目③	項目④	項目⑤	項目⑥	項目⑦	項目⑧
順位 1	32	19	3	9	9	119	22	7
順位 2	30	12	3	13	23	32	16	4
順位 3	6	9	4	10	11	15	10	5

順位1の項目⑥「将来性があるから」が群を抜いて頻度は119名であった。これは質問一の結果と同じように、大学生たちは高く中国語の将来性を評価し、現在懸命に勉強する姿が目には浮かぶ。また、当項目はすべての順位において1位となっていることが分かった。

順位1で2位を示している項目①「友人と一緒に勉強しているから」は、友人の存在が無視することができない。友人とは、時には励まし合い、時には張り合い、競い合うことによって、共に勉強に励み、精進する貴重な存在である。

4. いままで中国語を勉強してきて、当初と現在のやる気の変化について伺ったところ、5段階評価で描かれたやる気曲線を以下のタイプに分類した。また、それぞれのタイプの特徴と頻度を明示し、頻度を（ ）に示した。ちなみに被験者220名の内、欠損値3名であった。

- ① \ 下り型：最初は大変興味があったが、冷めていくタイプ（50）  
 \*② / 上り型：次第に興味を湧き、大変興味を示すタイプ（38）  
 ③ 一字型：最初から最後まで一貫して、あまり変わらないタイプ（14）  
 \*④ V字型：一旦落ち込みがあったものの、また興味を示すタイプ（74）  
 ⑤ 逆V字型：一旦興味を示したが、やはり興味が無くなっていくタイプ（22）  
 \*⑥ N字型：一旦興味を示し、落ち込み、また再度興味を示すタイプ（18）  
 ⑦ 逆N字型：最初は大変興味あり、一旦落ち込み再度興味を示すが、最後にやはり興味が失うタイプ（1）

以上の結果から特に\*印のところを注目して見ていくと、つまり最後に興味を示すタイプは217名の内130名を占めている。実に60%弱の大学生は、新しい言語を習得するには調査期間中に最後まで興味を示すことになった。

更に、上級生のやる気曲線を統計し、Table 4に示してある。上級生97名の内、欠損値は1名、2年生は64名と3年生は32名であった。上級生の中に最後まで興味を示すタイプを統計して見ていくと、97名の内56名が占め、つまり、57.7%の学生が語学の内容が進級に連れ難くなったにもかかわらず、半数以上の学生がやる気を持ち続け一所懸命勉強することが確認できたといえよう。一方、上級生に中国語を更に興味を持ち続け、一つの外国語をマスターさせ、就職に繋がり、如何に職場に即戦力になる者を育てるかは、今後も本学科の課題であろう。

次に、質問紙の内容を確認するため、SPSSという統計ソフトを使い、因子分析(主成分分析)を行った。質問紙の第5問から15問までは、速水(2006)の仮想的有能感尺度を用いた。因子分析の結果では、「仮想的有能感」の項目は1因子として認められた。Table 5に因子分析の結果を示している。これをもって、仮想的有能感尺度の信憑性を確認できたと言えよう。

更に学年、やる気曲線から分類した「やる気型」、やる気の合計得点、上級生のやる気型、仮想的有能感の合計得点、週の中国語履修コマ数などの関連を調べるため、相関係数を求めた。相関係数の結果はTable 6に示してある。ここから、「学年別」は「やる気型」と「上級生のやる気型」と「仮想的有能感の合計得点」と「週の中国語履修コマ数」の間に正の相関が見られた。そして、「上級生のやる気型」は、「仮想的有能感の合計

Table 4 上級生のやる気曲線の頻度 (n=97)

	上級生	2年生	3年生
①下り型	32	25	7
②上り型	37	29	8
③一字型	12	10	2
④V字型	7	0	7
⑤逆V字	8	0	8
⑥N字型	0	0	0
⑦逆N字	0	0	0

Table 5 因子分析の結果

	成分		
	1	2	3
学習動機	.112	.616	.400
継続工夫	.095	.631	.206
継続動機	.111	.378	.265
質問 5	.720	.108	-.106
質問 6	.700	.179	-.156
質問 7	.640	-.011	-.122
質問 8	.673	-.019	-.231
質問 9	.664	.249	-.132
質問 10	.485	.011	-.411
質問 11	.687	.128	-.021
質問 12	.560	-.067	-.342
質問 13	.530	-.404	.393
質問 14	.507	-.410	.470
質問 15	.464	-.330	.426

Table 6 相関係数 (n=220)

	学年	やる気型	やる気合計	上級やる気	有能合計	週コマ数
学年	1	.162	-.060	.720	.211	.317
やる気型	.162*	1	-.005	.082	.093	.089
やる気合計	-.060	-.005	1	.047	.061	.074
上級やる気	.720**	.082	.047	1	.165	.199
有能合計	.211**	.093	.061	.165	1	-.006
週コマ数	.317**	.089	.074	.199	-.006	1

\*\*p<.01 \*p<.05

得点」と「週の中国語履修コマ数」の間に正の相関が見られた。つまり、「仮想的有能感の合計得点」は、「学年別」と「上級生のやる気型」と相関があったものの、「やる気型」と「やる気の合計得点」には相関が認められなかった。今回は、仮想的有能感の11項目をまとめて合計得点という形で分析したので、これからは、各項目との関連性を更に詳しく調べる必要があろう。

#### IV. まとめ

本研究の第一の目的は、中国語を学習し始める動機づけと動機づけレベルの変化について調査することであった。調査を分析した結果から、まず質問紙第1問に、中国語を学習する動機の理由として47.7%の被験者が選んだのは「将来に役立ちそう」であった。大学生たちの多くは中国語の重要性と将来性を高く評価していることが分かった。次に、質問紙第2問に、勉強し続ける工夫として、31.8%の被験者は「目標を定めて、頑張るようにしている」を選んだ。また、21.8%の被験者が「テストがあるから」とうまくテストを利用し語学の勉強を続けた。ここから、大学生たちは積極的に目標を定め、内発的動機づけを高めながら、うまく外発的動機づけの因子である「テスト勉強」を利用し、語学力を身に付けていくことが分かった。そして、質問紙第3問に、今後中国語を長く勉強し続けていく動機の想定について、54%以上の学生が「将来性があるから」という項目を選び、やはり中国語の重要性と将来性に見添えた結果だといえよう。更に、質問紙第4問に、4ヶ月間に渡って学生たちの動機ややる気の変化に着目し、やる気曲線を作成した。それに基づき、やる気曲線を7つのタイプに分類した。この結果によると、大半の60%弱の学生が中国語の習得には積極的であり、最後まで興味を持ち続けた。ただし、落ち込むタイプの33.6%の学生たちに目を向ける必要もあろう。ここで、いかに興味を示す学生たちの学習意欲を保ちつつ、落ち込む学生たちの学習意欲を再度上げる工夫は、今後も教学上大きな課題である。

次に、本研究第二の目的としては、動機づけとやる気の変化に、仮想的有能感との関連を調べることであった。因子分析をしたところ、仮想的有能感の全ての項目は1因子として認められた。更に、関連項目との相関係数を求めた結果、「仮想的有能感の合計得点」は、「やる気型」と「やる気合計得点」との相関が認められなかったものの、「学年別」と「上級生のやる気型」との相関が認められた。今回は紙面の関係で、ここまでの分析結果しか載せられないが、今後相関のある項目の更なる分析と仮想的有能感の各項目との関連や群分けの作業をしてから詳しい分析をすることが必要となった。

今回の研究を通して、改めて、外国語の勉強は根気強く地道に頑張り続けることが必要であることを再確認した。しっかりとした目標に向かって、強い学習動機を保ちつつ、達成感を味わいながら、時に挫折をしながらも這い上がる勇気を持ち、一步一步歩いていくのが不可欠であろう。楽にして短期間で語学をマスターできるという考えは、新聞や雑誌でよく見かける広告のように、ハイテクが進んでいる現代では、不可能なことではないと錯覚しやすいであろう。速水（2006）や宮川（2004）によって、インターネットやコンピューターの使用と仮想的有能感の関連が示唆された。器用にハイテクを操る若者たちは、その操作が自信に繋がりが、やがて自信過剰に陥り、自分にはなんでもできると錯覚させてしまうのであろう。今一度謙虚な心を思い出し、地道に努力してほしいものである。社会はここまで進歩してきたので、逆戻りはなかなかできない。教育現場にも同じよ

うなことが言えるであろう。現に本学科で中国語の学習は、メディア教材を駆使し、授業中や宿題の練習と提出もコンピューターを使用し、コンピューターが欠かせない存在となった。大きな成果を上げることができた。現在、仮にコンピューターの使用を取りやめることにしたら、即にはパニック状態になるであろう。世の中、このような凄いのを使わない手はないし、物質的な豊かさも悪いものではない、ただし、人間の心は初心に帰って、謙虚な心を持ち、人に対しては思いやりを持ち、物に対しては誤った使い方をしてはならない。地道に努力してこそ、やがて語学力がしっかりと身につけ、その語学を操りながら人と交流することができるであろう。その時、やがて真の友ができ、真の国際交流ができよう。

#### 引用・参考文献

- Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation* Princeton, NJ: D.VanNostrand.
- 陳 恵貞 1993 子どもの内発的動機づけを育てる条件について 名古屋大学大学院教育学研究科修士論文
- 陳 恵貞 2006 大学の外国語学習者における動機づけに関する実態調査 愛知淑徳大学 言語コミュニケーション学会『言語文化』Vol.14, 16-30.
- 速水 敏彦・木野和代・高木邦子 2003 自主シンポジウム「仮想的有能感」をめぐって 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 46-47.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学教育発達科学研究科紀要(心理発達科学研究科) Vol.51, 1-8.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E.H. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, Vol.5, No.2, 127-135.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2005 他者軽視に基づく仮想的有能感-自尊感情との比較から- 感情心理学研究 12巻2号, 43-55.
- 速水敏彦 2006 他人を見下す若者たち 講談社現代新書
- 速水敏彦・小平英志 2006 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究 14巻2号, 171-180.
- 木野和代・速水敏彦・高木邦子 2004 仮想的有能感の発達の变化-横断的データを用いた検討- 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 34.
- 木野和代・速水敏彦・高木邦子 2005 青年の日常的な感情経験と仮想的有能感 日本感情心理学会第13回大会プログラム・予稿集, 33.
- 小平英志・速水敏彦・青木直子・松岡弥玲 2006 仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 131.
- 宮川純 2004 インターネット利用と仮想的有能感の関連 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 修士論文
- 宮本美沙子 1993 ゆとりある「やる気」を育てる 大日本図書, 16-17.
- 高木邦子・速水敏彦・木野和代 2004 仮想的有能感尺度の妥当性検討 日本教育心理学会 第46回総会発表論文集, 33.
- 高木邦子・速水敏彦・木野和代 2005 有能感タイプと日常生活に対する評価-経験抽出法(ESM)による検討 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 381.
- 高木邦子・小平英志・浦上昌則・脇田貴文・速水敏彦 2006 対自・対他評価と仮想的有能感の関係 仮想的有能感概念とその尺度の再検討(2) 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 410.
- 上淵 寿 2004 動機づけ研究の最前線 北大路書房
- 植村善太郎 2006 仮想的有能感と就職活動に対する意欲, 就労観との関連 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 135.

- 浦上昌則・小平英志・高木邦子・脇田貴文・速水敏彦 2006 帰属様式と仮想的有能感 仮想的有能感概念とその尺度の再検討（3） 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 406.
- 脇田貴文・高木邦子・小平英志・浦上昌則・速水敏彦 2006 仮想的有能感尺度に対する項目反応モデルの適用と検討 仮想的有能感概念とその尺度の再検討（1） 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 416.
- 山田奈保子・速水敏彦 2004 仮想的有能感と性格検査との関連-16PMとの関連カラー 日本パーソナリティ心理学会第13回大会論文集, 100-101.